

國際射的大競技

小酒井不木

青空文庫

昨年オランダに開かれたオリンピック大会で、わが日本選手が三段とびの第一等に入選したとき、私たちが内地の日本人がどんなに喜んだかは、おそらくまだ皆さんの記憶にあらたなるところであると思います。あの新聞記事を読んだせつな、思わずも私の目には熱い涙がたまりました。すべての競技がそうでありますけれど、なかんずく国際競技ほど人の血をわかし肉をおどらすものはありません。

今からおよそ五十余年の昔、普仏戦争の起こるすこし前、フランス陸軍省の主催でパリーの郊外に射的大会が開催されました。当時フランスには世界各国から軍事研究者が留学にきていて、わが日本からも十人余りの士官が派遣され、それらの人々が射的大会に招待されたのでありますから、いわば国際射的大会となったわけです。

当時日本人は、欧州人から見れば、まったく眼中になかったのであります。日本という国さえも認められてはいないくらいでした。そうして、日本人そのものはいえ、ば、欧州人よりも体格は劣るし、有色ではあるし、言語も不自由であるから、自然軽蔑されたのも無理はありません。

けれども日本人には、祖先伝来の日本精神があります。いかなる困難とも戦って、あ

くまで目的に進むという尊い精神があります。その精神がことごとくあらわれますから、当時の滞仏士官も、さほどの屈辱を受けずにすみしました。その証拠には、射的大会へ招待されたのでもわかります。

大会へ招待されたのは、当の仏国のほかに、英、独、露、伊、西、日の六カ国でした。前日予選が行なわれましたが、仏、英各三人、独、露各二人、伊、西、日各一人が選にはいっただけでありました。この予選にはいった十三人が、翌日晴れの競技を行なうことになったのであります。日本人で入選したのはMという陸軍工兵大尉でありましたが、予選の点もはなはだふるわず、かろうじて入選したくらいでありました。

その日、同僚の士官たちは、M大尉をかこんで、

「おいM、明日はしつかりやつてくれ、日本人の名声をあげるには絶好の機会だ、どうか祖国のために万丈の気炎をはいてくれ！」

と、口をそろえて激励しました。

M大尉は、歩兵銃の研究にきていたのでして、いわば射撃では専門家なのです。M大尉は静かに語りました。

「ありがとう。おおいに注意して見苦しい成績はあげぬつもりだ。今日の不成績は、ひき

ようないい方だが、銃じゆうがよくなかったというよりも、ぼくの使った銃じゆうの研究けんぎゆがたりなかった。明日あすの競技けいぎにつかう銃じゆうはここへ貫もらつてきてあるから、これから諸君しよくんとともに、この銃じゆうの研究けんぎゆにゆきたいと思う。いつしよにきてくれないか」

だれも異議いぎのあるはずがありません。一同は、射場しやてきじやう近くの野へ出て、M大尉エムたいいの射撃演習しやげきえんしゆうを手伝いました。ごしようちのとおり、銃じゆうには一本一本違ちがつた個性こんせいがあります。同じ人間にんげんが作った銃じゆうでも、それぞれ、その弾道だんどうだとか、着弾距離ちやくだんきよりだとかがちがいます。それゆえ、射撃しやげきを行なう前まへには、銃じゆうの個性こんせいを十分研究けんぎゆしなければならぬのであります。

M大尉エムたいいはおよそ二時間あまり熱心ねっしんに研究けんぎゆしました。的ていを射いては、弾丸たまのあたつた場所をしらべて研究けんぎゆすること、数十回すんじゆかいにおよびました。

「よしー！」

最後にM大尉エムたいいはきつぱりといいました。

「明日あすはだいじようぶだ！ けつしてヒケをとらぬつもりだ！」

そう自信じゆんありげな口調くちやうに、士官しやんたちは歓声かんせいをあげて引きあげました。

いよいよ大競技だいきぎの当日たうじつがきました。四月しがつの空そらはうるわしく晴はれて、遠とほくに見ゆる伽藍がらんの

塔が絵のようにかすんで見えました。早くも観衆は場外にあふれ、勇ましい軍楽隊の合奏が天地に響き渡りました。

はるか二百メートルをへだてたかなたに十三個の的が土手の前に並び立っております。こちらから見ると、まるで一点にしか見えません。それほど当日の的は小さかったのであります。普通は大きな的で、あたり場所によって点数がきまるのですが、この日は、あたれば十点、あたらねば零点、しかもわずかに三発しか与えられていないのであります。

先ず十三人の順序が抽せんによつて定められました。すると、どうであろう、わがM大尉は縁起悪くも最後の十三番となりました。西洋では十三という数を忌みきらいます。その忌まれている数を、日本人が引きあてたのです。わが応援の士官たちも思わず顔を見合わせましたが、M大尉の顔はりんとして輝いているだけでしたので、人々はまずあんなどの胸をなでおろしました。

いよいよ第一番のドイツ人が火ぶたを切りました。ドン！ と一発。

人々はかたずをのんで、的の下の壕からの合い図を待ちました。赤い旗が出て上下に振れば十点、黒い円形の弾痕指示器が出て左右に振れば零点なのです。

ヒョイと出たのは黒い指示器。それが左右に振れました。ああ！



ついで第二番、第三番と進みましたが、いずれも零れいてん点ばかり、最後にM大尉エムたいいの番になりました。ああ。見ていた日本士官たちの心はどんなだったでしょう。

やがてドンと一発！

おお！ 赤い旗が上下に！ 揺ゆれる揺れる。

わッ！ という歓かん声せいは天地を轟とどろかしました。日本士官は思わずも抱だき合あって踊おどり上ありました。しばらくはすべての人の拍はく手しゆが鳴りやまなかつたのであります。この光栄、この名譽めいよ！

ついで第二回目になりました。第一番のドイツ人はみごとにあてました。それからあらぬ人とあつた人が相伯仲あいはくちゆうし、最後にM大尉の番になりました。人々はいっせいに注目しました。

ドン！

ああ、あわれ、黒い指示器が。

士官たちの歎なげき！ けれども当のM大尉エムはすこしも落胆らくたんしないのみか、にっこりとしておりました。

ついで第三回。その結果二十点を取ったものはドイツ人とフランス人が一人ひとりずつで、ス

ペイン人が零^{れいてん}点。あとは十点ずつでした。もしM大尉があてれば、三人の決選になりま
す。

そのときの応援^{おうえん}士官の心持ちはどうでしたでしょう。日本の名誉はこの一発にかかっ
ております。

ところがです。あわれにも第三回の発射^{はつしゃ}には黒い指示器が左右に振^ふられたのでありま
す。

審判官^{しんぱんかん}はまさに宣言をくだそうとしました。

そのときM大尉はつかつかと進みよつて、りゆうちようなフランス語で大声に申しまし
た。

「審判官^{しんぱんかん}殿^{どの}。私はたしかに三回とも的を射^いてました。けれども、それは壕^{ごう}の中にい
る人にわからなかったのであります。第二第三の弾丸^{たま}は第一の弾丸のつらぬいたあなを通
つたはずです。どうか土手^{どて}を掘^ほって弾丸の位置をおしらべてください」

このことばに人々はM大尉^{エムたいい}が発^{はつきよう}狂^{きやう}したのではないかと思ひました。けれども自信
ある態度^{たいど}におかすべからざる威厳^{いげん}がありましたから、審判官^{しんぱんかん}は、大尉^{たいい}のねがいをききま
した。

やがて土手が掘り返されました。

見よ、そこには三発の弾丸がねずみのように重なっていたではありませんか。

この奇蹟！この妙技！

再び起こる喝采の声！かくてM大尉は第一等の栄冠を得て、予定通りわが日本のために万丈の気炎をはきました。

(昭和四年四月号)

青空文庫情報

底本：「少年倶楽部名作選3 少年詩・童謡ほか」講談社

1966（昭和41）年12月17日発行

底本の親本：「少年倶楽部」講談社

1929（昭和4）年4月号

初出：「少年倶楽部」講談社

1929（昭和4）年4月号

※表題は底本では、「国際射の大競技《ごくさいしやてきだいきようぎ》」となつていま
す。

※樺島勝一（1888（明治21）年7月21日～1965（昭和40）5月31日）の挿絵を同梱しました。

入力…sogo

校正…noriko saito

2017年3月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

国際射的大競技

小酒井不木

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>